
龍旅の記

OGRE-ASHYURA+1

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍旅の記

【Nコード】

N3750Y

【作者名】

OGRE - ASHYURA + 1

【あらすじ】

龍族と人間は太古の昔から交流を持っていた。しかし、人間が身勝手にもその関係を打ち碎き両族は敵対する。そして、龍族と交わりのある人や人に交わりのある龍族の交わりを語る。

龍旅の騎士

龍族の騎士

激しい戦争の絶えない大地の真つ只中……。剣を杖の代わりにして少年騎士が森の中をふらふらと進んでいく。足取りもシャンとせず剣を握る手も痙攣して、既に視界は霞み体の限界も近いと見えた。どのような戦場で受けたのか深い傷口からは真紅の血液の流出を止められず負傷した箇所を庇うこともできない上に体を支える力も無く……。そのまま、けもの道の真ん中に彼は倒れてしまった。剣を左手の横に投げ出し、うつ伏せになった状態で倒れた彼はすぐに動けなくなってしまう。血の匂いが立ち込めてだんだんと野生の生き物が集まる。この森には肉食の野獣が少なからしく……。最初に彼の周りには小型の草食動物や鹿などの中型と言える大きさの草食獣が集まる。皆、彼を守るように集まり次々に数が増えていくのだ。夜の間中は彼の側から離れず数も増す一方である。森の住民たちは彼に何を感じたのだろうか……。彼を守るように……。離れず牡鹿や野生の馬などの大型の草食獣、……。遂に肉食獣までもが守りに近づいてくる。熊や狼、大きな蛇まで彼を守るように……。夜が明け、靄がかかりはするが開けた森のお陰なのか日光は十分に届き彼らを照らしている。そこに木の実を集める採集用の鞆を腰に提げた少女が通りかかった。一瞬だけ血の匂いに顔をしかめたがすぐに騎士の存在に気づき近くにいた樵^{しゅう}風の服装をした男性を大声で呼んだ。

「お父さん！ 男の人が倒れてる！ お父さん！」

「何！？ うお！ 何なんだ！？ この状況は！」

その少女が近づくと大型の動物たちはゆっくりと森に帰り始める。大きな動物たちから順に離れ中型、小型とその場所から居なくなり

最後に兎とリスが少女にすり寄ってから帰ると……。その少女の父親と少女が互いに肩を通すように担いで彼らの家に運んでいく。運ぶには重すぎる鎧は途中で彼から取り払い、少女の方は長い黒髪や分厚い筋肉の胸板、鋭い爪と異様に発達した犬歯と大きな瞳孔、人間とは別の特徴を多く持つ彼が気になるらしいが彼を家で介抱し騎士が目覚めるのを待つ、昼になると彼女の父親は騎士の鎧を回収しに再び森へ向い……。母親と共に彼の怪我の手当をし続ける少女。色白で見目麗しいの言葉がそのままではまる少女は村の中でも人気がらしい。水を汲むために河原へ行くのにも何人もの村の男達が手伝いを志願する。しかし、それを断って彼女はヨタヨタと細い足を前に出して水桶を果敢に運び彼の傷を丁寧に洗って行く。白くて細い指と細い腕が傷に触れる度に騎士の様子を確かめるために顔を見ていた。それでも騎士は目覚めずに傷を洗い終えた少女は、椅子に座り様子を見ていたのだが……。麗らかな陽光に当てられ、うつらうつらし始めている。そんなときに彼女の耳に騎士の声が届いた。

「ん……。ここは？」

「あ、起きたの？ よかったぁ……」

「お前は……人間か？」

「え、うん、貴方もそうでしょ？ 別に大きな違いはないし」

「そうか……」

ベッドに手をついて動こうとする彼だが……。少しも動けない。彼自身は気づいていないようだ。彼の傷は深く、簡単には自身の力だけで治癒できない程深く、傷ついている。胸の辺りに刃物でざっくりやられた傷痕があり細い切り傷や擦過傷程度なら体中にあるようだ。それに、背中には沢山の矢傷があった。彼の場合、人間でないために生きていられたという方が正しいのかも知れない。そんな彼の腕には大きな刺青のような物があり、それを隠すように彼はベッドの近くの机の上に置かれた自分の上着を取ろうと手を伸ばし掴

もうとした。しかし、それすらできない程に彼の体は大きく傷ついていて動くことすらままならないのだ。綺麗に畳まれた上着を掴めずにベッドから落ちる自分の体すらも満足に支えられない彼を彼女は必死に掴んでベッドに押し上げる。大柄で筋肉質な男と華奢で見るからに細い色白な少女では情景としていろいろと不釣り合いだろう。しかし、彼女も健気に……頑張って彼を押し上げる。普通よりは少し身長はあるが少女の方はあまり馬力があるとは思えなかった。騎士の体をよく見れば刺青は腕だけではない。体中のいたるところに同じような模様がある。体が動かせないと解るや彼は急におとなしくなり、ベッドに横になって窓の方を向いた。粗末ともいえないが豪華とも言えない石造りの古い家の一室に二人は居続け、彼女は氣を使って話しかけたりもしたようだ。しかし、それからというもの、彼は一言も口を開かなかったという。彼女の父親が鎧を回収しその部屋に置きに入るがそれすら無視し運ばれて来た昼食も完全に無視している。見かねた少女が食べさせようと匙で取り上げて口に運ぼうとするが……。口も開かない

「……あの……、お口に合いませんでしたか？」
「お前は何故、見ず知らずの俺にそこまでする？」
「え、あ、いえ、傷ついた方をほおっておくことなんて……」
「そうか……、俺が龍族だと知ってもか？」
「え？」
「何度も言わせるな！俺は龍族の騎士だ！貴様ら人間の恩情など受けない！誇りを捨ててまで俺は生きる氣も無い！俺の剣はどうした！どこにやった！」

そこに逞しい体格の彼女の父親が入って来た。彼女の父親は龍族の少年騎士の持ち物とは別の剣を丁重に手渡し言葉を告ぎ始める。よく見れば彼女の父親は農民にしては無骨で傷の多い男性だった。その彼は過去を語りながら少年に語り聞かせる。さらに、はるか昔

の……。彼ら龍族と人間の始まりからの昔々からの話だった。人間と龍族はその昔は仲もよく共存のできた民族だったのだ。しかし、文明が肥大し知恵を大きく発達させて強欲になった人間達は人間同士での大規模な戦争に龍族を巻き込み世界中の各地で戦闘を始めたのだ。龍族はそんな人間に愛想を尽かして人間との共存という手段を捨てたという。中には人間に友好的な龍族も居たが昔のように人間と龍族との交友は密でなくなり廃れた。そのために、人間の一部は巨大な力を有する龍族を『悪魔』の化身として忌み嫌い、殺戮までもを行っている。彼女の父親もさのことについて言い難そうではあるが歴史を語り、次は自身の体験と彼を落ち着かせるための話を始めた。どうやら、彼には龍族との交友があるらしいのだ。昔懐かしいように天井ともその先にある大空ともつかない物を仰ぎ見ながらその男性は言葉を深く刻んで行く。

「私も龍族の血を体に流している。いや、血縁という訳ではない。昔、昔のことだ。エンバースという龍族の騎士が瀕死の私に血を分けてくれたのだよ。エンバースが今どこで何をしているかは解らない。だが、私が龍族に恩があることも確かだ。君を見た瞬間に娘は人と勘違いをしたようだ。それほどに君たち龍族は人間と似通っているのだよ」

「エンバース？ ロナルド・エンバース公爵のことか？」

「彼を知っているのか？ ならば、今はどこに？」

「ああ、エンバース殿はこの区域での戦闘の引き金となった方だ。

彼は人に殺された。戦争の策略を含んだ罠によって……」

「……そうか、なら、君を止めることは私にはできない。使うならばこの剣を使え、それはエンバースから貰い受けた誓いの剣だ。その剣にかけて私は嘘をつかない。君が回復ししだい出ていくのもよし、残るもよし、だが、私には私の動きがあるのだよ。君が回復するまでは面倒を見なくてはな」

彼も鞘から引き抜いて剣を眺めた。確かに剣の剣身には『ロナルド・エンバース』という名前が刻まれている。その剣を鞘に納めてから割合と大きな体をもたげて少女の父親を眺めるように緩く睨みつけている……。これまでの口振りから今の彼には簡単に人間を信じることができないのだろう。しかし、彼は鞘に包まれたその鋼を鍛えられた白刃の剣を握りしめながら噛み締めるように言葉を告いだ。彼にも彼なりの流儀や考え方があつた。曲げの効かない性格の騎士の少年は、その漆黒の瞳を少女の父親に向けて威圧するように再び睨みを効かせた。

「貴様等の言うことの全ては信用しない。だが、エンバース公爵との交友はこの剣の語りを信じよう。それに、俺はな……。受けた一度でも受けた恩情の分だけは返す。この周辺の村の警護をしてやる。どうせ、戦争の波でこの周辺にも賊が往来し始めるはずだ。体の回復などすぐにできる」「無理はするな。私の息子も戦争で死んだ。私だけおめおめ生き残り……。君をほおっておけなかつたのはたしか……。命は一つしかない。大切にすべき物だ」

それから彼は一日の休養で恐ろしい回復力を見せた。回復したとは言つが完全に回復した訳でもないことに加えて彼がもともと持っていた剣は芯が折れていて使い物にならないらしい。そのため、彼はしばらく周辺の農家の手伝いをするといふ数日が経過した今も未だに村に残つていた。それから、彼はだんだんと交友の幅を増やし、若い農夫達の手伝いや世話をしてくれた少女の家族を手伝つて農業なども手伝いを進んでしている。特に森での採集などには警護を大きな目的として付き添う。彼の口からは悲しい連鎖が語られた。戦争は人間の心に……。いや、人間だけではなくこの大地に住んでいて知能がある生き物に荒みを与え治安の悪化を呼ぶ。そのため、戦争だけを悪の根元とは一概に言えない。彼からすれば……。戦争よりもその後に残ることの方が後味が悪い。根元の戦争においての欠乏か

ら盗賊や山賊、海賊などの賊を始めとして暗殺をし金を稼ぐ殺し屋や敗残兵を専門に狩る殺し屋なども動き弱い者は守る術を知らずに次から次へと削られていく。華やかに国が祭り上げて国家間が起こした戦争がいくら正当化されていてもそれが血生臭いことには変わりがない。そして、いつも憂き目を見るのは弱い者……弱い者に向けられる狂気はいつ、いかなる時も油断ならず彼等を襲う。蛇に狙われた蛙が助かるには警戒するしかないのだ。

「殺気……伏せろ！」

「うわ！」

「親父殿はお嬢さんを守ってください。俺は敵を打ちのめした後に合流します」

「解った！」

それから彼は武器を使わずに数人の弓を持った盗賊たちを蹴散らして行く。人数など定かではないが彼が振るう拳は族の顔や体にめり込み嫌な音を立てて木々にぶつかり死ぬか伸びていった。それから、スイッチを切り返したように、およそ人間とは思えない速度で走り抜ける。近づくにつれて強まる寒気がするような背筋を撫でる感覚……物が燃える煤臭い匂いや騒ぎ声や奇声、怒号など……。ここまでくれば誰でも街が襲われていることくらい理解がきよう。何人も村人が殺されていた。手遅れになる前に対処をしなければ皆殺しにあってしまう。そこで、彼は……自らが枷をした禁忌の技を発動し、世話になった村人を守る決意をする。彼の背中から翼が生えて体の巨大化が始まった。林がメリメリと音を立てて割れ始め、木々を押しつぶし首をもたげて目標を決めた彼は真下にある盗賊の気配に気づいたらしい。盗賊の数人が気づかれたことに気付き、逃げ始めるが……。太い腕がそれをよしとはしなかった。引きずられるように攫われそうになっていた村人は怯えている。彼は生き残っていた数人の村の人間をすくい上げて武器を持った村の男達のとこ

るに送り届ける……。そこには最初に別れた少女やその父親、数が減っては居たがこの数日間で仲良くなった若い衆もいた。それに背を向けて彼は皆に別れを告げる。

「今日でお別れだ。俺は奴らを蹴散らす。俺のことは忘れ、皆で仲良く生きてくれ。お前たちは人間の中でも好意が持てた。では、達者でな」

その場を飛び立ち、逃げる盗賊達を空中から見つけて家畜や攫った女性を積んだ荷馬車の屋根を爪で崩す。怯える皆だったが聞き覚えのある声を聞き少し安心したように意識を緩めたらしい。とうの彼は荷馬車へ覆いかぶさるように降りると翼と体を丸め、巨大な翼と体の表面を覆う鱗で雨のように放たれる弓から内側の人間達を守る。彼ら龍族の真髄は体の堅さと強い力、そして、咆哮と息吹^{ブレス}だ。戦闘において強力なそれが盗賊を巻き込んでいく。龍族が知識をつけて宗教的な思想において彼らを嫌うのは彼らが強すぎるからだ。彼はすぐにやりすぎを抑えるために体を人間の姿に戻し、人間の皆を生きている荷馬車で元の所へ運んでいく。荷馬車の周辺には村人が集まり再開や解放を喜ぶ。馬から彼が降りるとその場から去ろうとするが……。少女が彼を引き止めようとしたらしい。彼を助けた少女だ。

「残つてよ！　ここに……」

「ふん、俺は龍族。貴様ら人間の生ぬるい生活にはついて行けない。傷つけられる前に……俺が貴様等を傷つける前に……俺は貴様らとは関係を切らなくてはならないからな」

「それなら……」

「ちっ！　全員伏せろ！」

突如として放たれた銃弾を一部だけ変化させた体に受けても体勢

を崩さない彼……。翼で後ろに居る住民達を守ったのだ。銃弾で数枚の鱗が剥がれ落ちた。だが、鱗の再生も体調が完全に回復している彼ならばどうということはないらしい。彼が睨みつける相手……住民に牙を向くのは国の軍である。この周辺の龍族は国に仇を為した罪人として扱われていた。その龍族をかくまった罰は一族郎党の『殲滅』だ。龍族に触れた者は汚れたと判断され……問答無用で殺されてしまう。

「もう少し、だな。動くなよ！」

龍族のもう一つの特異な点は人間の間で失われた『魔法』の技術を継承していると言うことだ。右手の前にエネルギー球を造り出し……火器を使う兵士たちは一瞬の閃光が見えた瞬間に薙ぎ払われる。兵士の中で動ける者も居るだろうが閃光で視界が霞み、見える訳がない。その間に彼は次に行くべきことを行った。住民を助けるのだ。体のさらなる巨大化をし住人達を……生き残った住人達を背中に乗せてなだらかな上昇をして空に浮きあがった。空をゆっくりと飛び抜け雲の波を撫でつけながら遠くへ遠くへ飛んでいくのだ。下方では……何かが軍と戦っている。違うな、彼が叩いた統率の取れていない軍を蹂躪しているようだ。……龍族の騎士たちらしい。彼等はそのまま遙か彼方へと消えていったのだった。雲間に吸い込まれ、彼らは遙か彼方の新天地へと逃れていく。彼らには新たな生活が待っているのだ。

半人半龍の美少女

半龍半人の美少女

かなりの時間を滞空していく。彼の判断基準で雲の下へゆつくりと降下していく巨大な龍……。脚が付き内部の天気を確認しつつ厚い雲を割って草原と森が割れる場所を目指して地面に着地した。背中から次々に住民達が降りて行き最後に彼が疲れの色を顔に見せながら人間の姿に体を戻している。村人達は周りを見回し危険がないかを確かめているらしかった。新緑の季節は過ぎ、森の葉や草原は濃い緑に移り生き物が活発に生きる時期になっていたのだ。龍族の騎士は彼らが木造の家屋を建築し終えるまではずっと近くに居る。いつ何時、攻撃を受けるとも限らないからだ。

「ヴァージさん！ 休憩にしましょう！」

「そんな時間か……ミーナも休め。給仕の活動で疲れているだろう」
「は、はい」

ヴァージと呼ばれた騎士の男は鎧ではなく、農民の服装をしている。鎚と釘を持って木造のログハウスをたくさん作っていたのだ。彼が今造っているのが最後のログハウスらしい。住民たちはここがどこなのかすら聞かされてはいない。しかし、ヴァージの安心してある姿から皆も徐々に安心して始めている。近くには海岸や川、湖などもあり生活には困らず、村となる土地からは少し距離があるが湖と川の上流付近には農地にできると彼が若い農夫たちを連れていった土地もある。そして、……彼がいきなり頭上を見上げて声をかけた。そこには彼が変身している時の大きさを軽く凌駕する巨大な頭があった。口からは熱気を吹き恐ろしい顔をヴァージに向ける。その瞬間に彼の目の前に背中折れた細身な老人が杖について現れ

たではないか。

「お久しぶりです！ 天爺^{てんじい}！」

「おお、混沌龍^{カオスドラゴン}の小童か。名を……なんと言ったかの？ 待て待て、急ぐでないぞ。ワシは記憶力はいい方なんじゃ。うゝむ……」

「ヴァージさん！ お茶がはいりました！」

「そうじゃ！ ヴァージじゃ！ って……ばらされてしもうた」

「ミーナ……」

「あ、済みません」

「これはこれは別嬪なお嬢さんなことで。綺麗なお嬢さんなら許す。うむ！」

その老人も人間の姿になった状態で彼らの集落となる場所に近づいて行く。彼は柔軟な思想を持つ龍族の老人らしい。これまで、龍族と人間の間に隔たりがあるとは言いがその老人曰く、そういう思想を持つ龍は局所的で西洋や新大陸の地方の龍族は特に多いのだ。そして、ここはそれらの土地から遠く離れ海に隔てられた孤島の中の一つ、周辺には数個の島が存在しその老人は一人で生活してきたのだと言う。ここで先に言っておくが龍族の寿命は定かではない。掻い摘んで言うと、龍族の中にもいろいろな種類の龍族が存在しており一概に『龍族』とくることができないのだ。それに龍族の中でもヴァージや天爺と呼ばれた老人のように人間に変身できる者とできない者が居ると言う。神格化されているのは後者の方でヴァージのように人間の姿をした龍族達は元をただと人間と同じルーツを持つ。それらの者は龍族と言えど人に近いと言えよう。

「ほえ、昔話みたい……」

「ほほほ、そうじゃな。そういえば、ヴァージは何歳になった？」

「今年で23歳になります」

「え？ もう、成人してるんですか？」

「そうだな。俺の年齢を言ったことはなかったか。……！」

「気づいたか？ 最近はよう来るようになってきておる。一当てやろうかのう？」

「構いませんよ。久しぶりに龍族を相手にしますが」

二人が海岸沿いに向けて歩く。村人たちはそれを生唾を飲んで見守っていた。翼が風を切る音はなかなか響く、その音共に海岸線の先には色とりどりの龍が多数滑空してくる。ヴァージが見せたゆっくりとした飛行とは違う。しかも、戦闘陣形とも見える編隊を組み相手は威嚇を見表す咆哮をヴァージと天爺に向けた。形態を変化させて先に飛んでいくのはヴァージだ。彼も咆哮を向ける、雄たけびなのだろう。一声高らかに咆えると相手よりも速度を上げて超低空飛行な飛び方を移し水面をけたたましく波立てながら先頭の黒い龍に体当たりした。敵の黒い龍は海面に落ちたがヴァージは翼でホバリングし一気に垂直上昇をする。敵らしい龍族も彼を追うようにそれに続いて垂直に太陽を目指す。しかし、敵の龍族はヴァージの速度にはついて行けない。それならばと彼らも考えたらしい。空は無限で移動の制限などはない。空で体を丸めた龍がターンをして二頭目の龍を叩き落としたヴァージの腹に額の角を突き立ててタツクルした。

「ヴァージさん！」

「どうじゃ？ 龍族同士の戦闘は痛快じゃろう。ヴァージの小童なら負けはせんよ。心配せんでもいい。……とくに、お嬢さんは飛びとって仕方ないんじゃないのか？ ん？」

ミーナがクエスチョンマークの嵐を頭上で起こした。父親は苦い顔をしている。老人は一瞬で気づいたのだろう。そう、彼女は人ではない。厳密には半龍半人と言おうか。彼女の父親がエンバースという龍騎士の血液を体に流していることは前に語ってもらっただろ

う。彼は結婚し、娘を残す前に血を体に受けていたのだ。言うまでもなく異種の血液を受けたのだから彼にも大きな変化があった。それを受け継いでいるのがミーナなのだ。ミーナがヴァージを人と勘違いしたのは自分が人ではないために同じ特徴を持つ彼が人であると思いこんでいたところになる。ミーナの容姿にも龍族の面影が強くなる。龍族は決まって端正な顔立ちと長い耳、発達した犬歯と広い瞳孔を持つ。ミーナは目が大きいため判断基準の中でも大きく人間が区別をつける『目』の観点では不自然に見えなかったせいだろう。村人もそこまで気にはしなかったらしい。耳も長いとは言うが純潔の龍族のヴァージ程長いわけではなく人のように丸みを帯び、犬歯も可愛らしい八重歯程度に見えるものだ。ついにヴァージと敵の龍族達が互いに落とし合い空に舞い上がる格闘戦闘に発展し天爺が様子を見るように海岸に立っていた。ヴァージの飛び方を見ているのだ。いかに龍族でもダメージの蓄積や炎症、後遺症などは起こる。ヴァージの体に起きていたことを瞬時に読み取る……。恐ろしい観察眼の老人だ。

「ほれほれ、どうした？ ん？ まさか、知らされとらんのか？」
「な、何が何だか……」

その瞬間に大きな水しぶきをあげて数頭いた龍族の内、二頭が海面に衝突した。一頭の龍族が撃ち落とした龍族の脇腹に爪を立てているようだ。海面には血が浮き色から推察すると敵の龍が負傷したと見える。見かねた天爺が飛び上がり逃げまどうように数頭の龍族がターンやひねりで空を飛び交う中に突っ込みヴァージを止めにかかる。彼はあくまで中立で追い払ったり昏倒程度ならするのであるがヴァージのように血を見る戦闘は好まないようだ。飛び上がるや長い尾で二頭目の上を取り急降下に入ろうとしたヴァージを上から吹き飛ばし残りの龍族も同時に海面に叩きつけた。

「やりすぎじゃ、見てみい、お前もやられたんじやる？ 黒騎士どもに……、ま、お前のことじゃ、皆殺しにしたんじやる？」

「そうですね、カッとなると見境が付かなくなってしまうんです」

「じゃろくな、戦場の守護神『混沌破壊龍』カオスエンドドラゴンの末裔じゃ。それも仕方ない。少しづつでいいのじゃ、自制をつけるといい」

「はい……血など見たくはないのですが」

それからは龍族の襲来も治まった。天爺の慈悲で負傷した龍族を恐怖という意味で怯えきっている龍族に預け、彼らがその海域から抜けることで命までは奪わないと約束しそこから見送ったのだ。それに村人も今回のことで改めて龍族の恐ろしさを思い知ったのだ。それを踏まえてここに住みたいというならばと天爺は彼ら村人の居住を快く承認してくれた。どちらかと言えばさびしくて仕方がなかったということから話し相手ができてむしろ嬉しかったと見える。天爺は島の中心の山へ飛んでいく。それから再びログハウスや他の施設の設営に取り掛かった。体力を消耗したヴァージは村人の勧めで休養し湖で水きりをしてる。紛いなりにも彼は守ってくれたわけだ。これが人間だけでは簡単に蹂躪されて終わっただろう。それにヴァージも脇腹に小さな切り傷がありその静養をしてみると言って彼らの進言を受け入れたようだ。湖面を長めながら自分の伸びきった髪の毛を結び直し再び平たい石を尻いだ湖面にぶつけて何回かバウンドさせる。それに興味を持ち集まって来た小さな子供たちに教えながら水きりをしているとミーナが現れた。

「どうした？ お前らしくない。カナリアが死んだみたいだぞ」

「……私、飛べると思います？」

「お前は人間だろ？」

「その、お父さんが……教えてくれたの。私にも龍族の血が混じってるって」

「そうだろうな、エンバーズ殿の血が少しだろうが混じっているは

ずだ」

「怖くないんですか？」

「何故？ 俺からすれば細い腕に華奢すぎる女の子のお前なんか脅威にならん」

その時、瞳が急に白くなるのを彼は見逃さなかった。龍族も共生するという意味で人間に近い形態になったという学識が古い古文書には記載されている。よって、ヴァージも今は黒い瞳だが、龍族の力を局所的にでも解放すれば瞳が赤くなり頬に黒い鱗が浮いたりするらしい。その変化が出ていることを確認したのだ。元が人間と認識されていただけに不安なのは彼にも心情的に理解ができる。ヴァージの爪が赤くなる。それを見せていたのだろう。ヴァージの種類は戦闘を行うのに適した龍族の戦士だ。それでも、知識として最低限の物を持つているらしい。不安を隠せないミーナを励まそうとしているのか彼も知らず知らず声が優しさを帯びる。

「このまま、人として生きていたいのか？」

「はい？ あ、いえ、別に、受け入れるのは簡単なんです。でも、ここには居られませんし、できればここに居たいです」

「人を傷つけるのが怖いなら自ら抑える方法を考えることだな。俺もそうだ。龍族なら少なからず本能で動く、俺のように知性が比較的に低い龍族は本能の赴くままに殺戮を行うこともあるんだ。だから、俺は群れるのを嫌う。別に俺だって好んで戦場に居る訳じゃない。俺の力が強大だから、それを求める者は少ない。しかし、抑えられない力は狂気ではないんだ。前にも言ったが俺は狂気の始まりを絶つたためにお前ら人間とはかわりたくないんだ。それが俺の龍族『混沌破壊龍』カオスエンドドラゴンとしての誇りと戒律でもあるんだよ。血なまぐささに慣れるな。それは俺からも言える」

白い瞳と金色の瞳がちらつくミーナの変化に逐一目を配る。この

近くには小さな子供も多い。こんなところで暴れられてはたまったものではないからだ。龍族は彼のように攻撃的な龍族から知性の高い頭脳明晰な龍族もいる。それに、龍族は何も人間に共生しているだけではなかった。龍族の中にはその他の種族に擬態している者も少なくはない。多くは爬虫類となり新種族としてこの大地で生きているが……。抑えるのに最低限必要だと語りながら抑制を行えるようにヴァージが彼女に魔法を教える。龍族の秘儀とでも言うべきだろうが……。戦争の始まりとともに龍族は彼ら人へ魔法の継承をしなくなっただけらしい。元々、魔法のような超常現象を含む秘術を龍族が生活において利便を生む技術を人間が開発することが多かった。戦争にそれらを転用されることを龍族は拒んだのだ。

「ミーナお姉ちゃんのおめめが真っ白！」

「ホントだ！　どうやったのそれ！」

「いいなあ、綺麗……」

「え？　え？」

「俺の魔法を解除したんだ。龍族の覚醒を少し刺激した。龍族同士は共鳴する。簡単には生殖本能とでもいおうか？　お前、何歳だ？」

「17歳です」

「十分だな」

彼は立ち上がり子供たちを連れていく。近づいてくる子供の注意をミーナから削ぐために沢ガニの釣り方を教えているのだ。沢ガニは敵とみなした者を威嚇し巣に入ってくる同者を手の挟みで挟む性質がある。小枝を長い紐……。彼の髪の毛で縛り、釣りあげる。それに子供たちが熱中している間に彼はミーナに必要な話を始めた。龍族同士の共鳴は基本的には龍族でしか起きない。半龍半人のミーナの場合は男の龍族が気配を見せたり特殊な匂い、フェロモンとも言いが生殖本能を促すそれを放出しなければ起きないと言っている。ゆえに、龍族が近づかなければミーナにはそういう心配はないのだ。

だから、先ほどまでミーナの反応が不安定だったらしい。ヴァージのように成人した龍族は生殖本能を抑えることもできる。だから、フェロモンの放出やその停止は自由に選択できると語っていた。全く、生物としてできすぎている。それでは人間が恐れるのもうなづける話だ。

「ということだ。俺がここからいなくなればお前には実害はないさ」「やっぱり残ってはくれないんですね？」

「無理だ。さつきも見ただろう？　俺は龍族の習性のせいでいつお前らを傷つけるとも限らないからな」

「私は、ここに居てほしいです」

「何故？」

「あなたが、限界を見たら私が交代すれば済むことですよ？」

「無理な話をするな。お前は元の体は人間なんだぞ。変身に耐えられる訳があるわけがない。バカも休み休み言え。死にたいなら別だな」

先ほどからミーナの様子がおかしい。顔は赤く熱を持ったように顕著な高揚が受け取れる。ヴァージはフェロモンを止めているはずだ。それなのに何故か解らないらしく今度はヴァージが困惑し始めた。彼は女性の龍族の発情の状態を知らない。覚醒というのが龍族の習性に触れることがそれだ。先ほどから無かった変化と言うならばミーナの首筋の辺りから甘い香りが漂うくらいだろう。そこに、ミーナの父親が現れる。彼の腕を見せて来た。そこにはヴァージにあるように模様がある。エンバースの血を受けた彼の変化だ。龍族の血を受けた人間は……人間の体が龍族のように強くなるという。簡単に言えば超強力な筋肉増強剤や皮膚を強固にする薬を体に入れたのと同じ状態になる。よって、彼は体がとても強い。それと同じ特徴をミーナも受けている。まあ、未だに人としての成熟しかしていないために力も弱く華奢ではあるが。

「ミーナの秘密を知りたいか？」

「は？ それは彼女に伝えるべきでしょう？」

「伝えたが……彼女には信じられんだろう。それが証拠に彼女は受け入れていないんだ。君に説明しておく。ミーナの母親は私と近い存在だよ。半龍半人の人間の女性なんだ。しかも、龍族とのハーフという特殊な……な」

ヴァージの絶句が解るといううなづき方をしたミーナの父親。彼はヴァージの腕に抱きついていて、ミーナを見てからヴァージの隣に座る。手には首飾りと思しき者を持ちそれを開いた。

皇龍の孫娘

皇龍の孫娘

ヴァージがそれを見た瞬間にさらに目を見開いて口を開いたり閉じたりと繰り返していた。そのペンダントの表に付けられた金細工の装飾は数十年前に滅んだ龍族の皇帝の紋章であり、その中には二枚の写真が入っている。少し違うか……、銀に移す写真であるため紙の写真とは少し違うだろう。開くと一枚目は彼にも見覚えのある写真で戦争の暴動で崩御された皇帝の写真だ。女性が皇帝をする龍族のしきたりどおり老婦人が写真には写りその下に確かに名前、出生と死去の年号が彫られている。その右横には……。彼女の母親と思しき似通った所の多い女性の写真がある。確かに……耳は丸く、目も大きい上に犬歯は目立っていない。だが、どことなく……皇帝と……。

「私の妻だ」

「そ、そんな、まさか……。皇帝の娘が人間とのハーフで……ミーナは……」

「そのまさかだよ。ミーナは龍族の皇帝の孫娘なんだ」

「あなたはいつたい何者なんですか？」

「私の名はパラディウス・アーク・エンジェリア。元は皇族の警備をしていた騎士だ」

「パラディン聖騎士だったんですか？」

「そう、私は君たち龍族に謝罪せねばならない男の一人だ。皇帝を守れなかった。そして、私も死に直面しその時に部下であったエンバースの機転で死を免れ、彼の庇護のもとで私と皇帝の娘だったフローディア・エリュシアンはあの農村で娘と息子をもうけひっそりと生活し、彼女は三年前に命を引き取った」

「それでは……」

「ああ、今の妻は再婚した妻だ。フロアの遺言で娘の最良を考えた結果でね」

ヴァージの思考は既に付いてきていない。ミーナが皇族の直系とはいかないが生き残りで孫娘……。しかも、その父親のパラディウスは龍族の血を体に流しているため……龍族の血量分配の方が多いだとすれば彼女はほぼ龍族そのものだ。パラディウスはそこから去って行く。高揚と龍族の本能から我を忘れている娘を後にし、その場を同じ龍族の青年に託したのだ。彼には解らないのだろう。こんなときにどのように声をかけてよいのかが……。ミーナはあいかわらず動かない。龍族同士の刺激の起こりで覚醒が早まるのは他の龍族……。いや、生き物でも確認はされている。特に知能があり群れる生き物はそうだ。群れを造る生物は親やその他の仲間の行動から学びとる。今のミーナがそれなのだ。本能から学び取っている。白い瞳は絶えずヴァージの目を見ては下に戻し、覚醒の兆候という物なのか丸みを帯びた少し長めの耳は角が見え始め、犬歯も歯を見せるたびに目立つ。爪は元々白いため長さが変わった程度の変化ではある。いつの間にか子供たちは天爺のところに行ってしまう姿が見えない。この土地は天爺の箱庭だ。危険な物は何一つ無い。安心して生活していける。彼もそれだから彼らをここに導いたのだ。

「ミーナ」

「なんですか？」

「少し、離れてくれ……。もう、戻れなくなるぞ」

「いいです」

「ダメだ」

「いいです」

「ダメだと言っているだろう！」

ヴァージがいきなり怒鳴ったことでミーナの半分酔いが入ったような覚醒が覚めてしまう。いきり立ち赤い瞳に怒りをあらわにしたヴァージに驚くミーナを見つめ、彼は少しやりすぎたと謝罪しながら向かい合う状態になるように近くの岩に腰掛けて話始めた。何故、龍族と人間が『共存』できず『共生』しかできなかったかだ。確かに、仲良く生きてこれた時代は人間との比率や知能の授受という観点で二種族が対等だった。しかし、今は奢る人間に龍側が愛想を尽かしている。その関係でどこも龍族との相性は良くない。よって龍族は嫌われていないにしても捕らえられる可能性は非常に高い。そして、龍族には強すぎる力という宿命も多にかかわる。その場には二頭が同時にとどまれないのだ。気性は個体によつてにまちまちではある。しかし、喧嘩や力比べで人間に被害が出ないはずが無い。そのことから彼女はこの村には覚醒と同時に居られなくなるのだ。今であればまだ大丈夫だ。自分が一人で生きていけるようになるではこの村の人間達の庇護を受けて生活できる。それも受けずに旅立つのは自殺行為に他ならない。彼は自分の覚醒のことからそういう体験をしているのだ。龍族が自分が龍と気づくのは生まれた瞬間ではない。それは両親の教育にもよるが大抵が十歳程度だ。しかし、彼は生れてすぐにそれを思い知り、一人孤独に生き、血に染まった生活を続けて来たらしいのだ。彼女のこれからの動向に敏感になるのもうなづける。そして、彼女は女性の龍族だ。彼とはまた違う何かがあるはずなのである。

「……ヴァージさんと一緒には行けないんですか？」

「俺が断る」

「何故？」

「お前はとことん聞きたがるな……。いいか？ 龍族の結婚や出産の適齢期はとても長い。まして、お前と俺のように数千年を生きるような龍族の血を引いているならばなおさらだ。いつ、そういう関係になってもおかしくない。普通の龍族は群れで生きる。女の龍族

の群れと男の龍族の群れでな。それは無駄に数を増やして争いを起こすのを防ぐためだ。あからさまにそれを破る事なんかできるわけがないだろう」

生き物の習性はいろいろある。人間のように簡単に子孫を増やしてはならない生き物も存在するのだ。まして、龍族は人間のように子供を守る性質がある上に出生率が高い。多くの龍の子供が生き残ってしまえば龍族同士の殺し合いが増え、それが原因で世界の崩壊を招きかねない。だから、龍族はそれを自粛しているのだ。食料は人間の姿の時であればそこまで張らないにしても生きる場所の関係での闘争は先の戦闘のように少なくはないのだ。天爺のように一頭でさびしく生きる決意がある龍族ならば別ではあるのだが……。二頭の番で生きるのはかなりリスクを伴うのだ。人に見つかる率も飛躍的に上がり、更に子供を残すのであればなおさらそれが顕著になる。龍族は半卵生という出産の方法だ。人間と変わりはしないが胎内で一つ、または双子の卵を孵化させ途中から胎生に切り替えるのだ。生存率は人間より高く女性の龍族の生還率も高い。

「い、いきなりそういうことを言われても。た、確かにヴァージさんのことは嫌いじゃないですけど。先立つ物が……」

「はあ……。バカだろう……。お前と俺がそう成るかならないかじやない！ 可能性の話だ！ 何千年を生活する気なのかは知らんがお前の口ぶりだとずつと一緒に居る気だろう？」

「はい」

「サラッと怖い事を言うな……。俺は要するに『番』になりたいのかと言いたいんだ。お前の解釈もそうだろう？」

「番……。夫婦？ ですか？ やん……。そんな」

「言葉そのものの解釈は正しい。だが……。少し違う気がする。とりあえず俺と来るのは諦めろ。お前がいくら龍族の血を多く体にもっていても俺についてくるのは無理だ」

彼がその場から立ち上がり村の方へ小走りに歩いて行く。ミーナの父、パラディウスに今のミーナの状態を伝えるためだ。おそらく彼女が村に居られるのはこれから数年程だろう。ヴァージの出現により発情という意味の覚醒の加速でミーナは強い刺激を受ければ一気に……花が太陽に導かれて開くがごとく、龍族へと姿を変えることのできる体になってしまう。人間から龍族への移行はかなりの苦痛を伴うが元々龍族の血量分配の多いミーナには痛みなどはなく軽い酒に『酔う』感覚に近い高揚感に感じられるだろう。加えて説明を盗み聞けば、龍族の皇族の種類は『セイントドラゴン聖帝龍』と言われ、龍族には珍しく平常時から人の形態のままに背中には小さいが天使に近い羽毛の付いた翼を持つと言う。もちろん大型化もできるが強すぎる戦闘力と馬力からそれを自粛し姿を現すのは式典などの時くらいだという。パラディウスへヴァージからの報告を盗み聞くとこうなる。その血統に加えてエンバースという龍族の血を受けたミーナはおそらく現時点での龍族の最強候補の一人に数えられると彼がつぶやいた。今は故人となったエンバースの龍の種類は『ガイアドラゴン大地聖龍』と呼ばれ大人しい気性とは裏はらに恐ろしい力を秘めた龍だという。特徴は体に結晶を持ち体が固い。その部分を説明するならば、額、両肩や関節の各部と尾の先端だろう。そのミーナがパタパタとせわしく足を動かして走りながらヴァージを追ってくる。それを目にいった瞬間にパラディウスがその場を離れるように去って行った。彼としては娘を外界に連れ出して経験を積ませる方がいいと感じたようだ。ヴァージとは逆の動きに彼はため息をついた。それもそうだが、龍の戒律は守るべき物であり罪には問われない。制約を持ち続けて子孫繁栄をせずに生き続ける龍族もいない訳ではないが彼ら二人にそれができるとは言えない。それをできるのは熟練した番だけだ。若い番に多いのが多くの子孫を残してしまうことだという。それが結果として先ほどの逸れ龍を生むのだ。

「何を話してたんですか？」

「お前のことだ。受け入れられるかどうかは知らんがな。龍族の皇帝になれるんだよお前はな。ま、俺もその一人ではある」

再び頭の上でクエスチョンマークの嵐を起こすミーナ。それをよそにヴァージはそこで話を切り上げると彼が少しの間だけ居住すると言って彼の住まいになっているログハウスに入りエンバーズの剣を取ってくる。それをミーナに手渡して父親に返すように伝えた。彼が使う必要が無いと判断したらしい。それからログハウスの完成もそうそうに若い農夫や漁師の志願者を天爺のところに連れて行き土地の特徴を聞かせるために集めるなどの取り仕切りを始めた。彼は23歳の若さに合わず節度と建設的な考えの強い男性だ。型物と言おうか？ その曲げの効かない型物男だから頑ななのもうなづける。時たまそれで喧嘩も多いが大抵は彼が途中で折れる。引際をわきまえているらしい。まあ、そうだろう。力の上で彼に勝てる者などいないのだからな。

「お父さん！ ヴァージさんがこれを返してくれって私に」

「そうか、もう、彼は心配ないか」

「え？」

「私は、彼の両親と刃を交えたこともあるんだよ。龍族と一言に言うが皆が同じ思想を持っている訳じゃないんだ。特に、彼の両親は人間を心の底から憎んでいた。だが、私は彼らと解り合う道を模索して私だけは彼らの信用を得ることができた……。しかし、彼らはその土地から去り、さびしい思いもしたがな」

それからのことはヴァージしか知らない。天爺の勧めで植物から繊維を得る方法を習い人々は麻の袋を造ることも覚えた。それ以外にも龍族の知識にあずかるところは大きい。羊の毛ではなく蚕かいこから糸を得る方法なども天爺は楽しそうに教えている。さらに、酒、燻くん
せい

製、発酵食品、大きな船の造り方や生き物との共生の方法などを教えていると見えた。その外側からヴァージは眺めるだけである。それに気づいた天爺がさびしそうに彼に声をかけた。ヴァージの性格をよく知っている彼の事だからそれを感じ取るのも楽なのだろう。皆が居なくなつてからひっそりと一人で去ろうとしたようだ……天爺の暴露で皆に知れ渡ってしまったようだ。

「おい、小童。もう発つのか？」

「……そろそろ行こうと思っています」

「ホントか？ ヴァージ！」

「行かないでくれよ！ 俺達はお前が龍族でも気にしないさ！」

「むしろ大歓迎だぞ！ なあ！」

「おう！」

温かな歓迎ではあるが彼はそれに丁重な断りを入れると……。無口で根暗な印象の若い男の中の一人がヴァージに近づいて行く。彼が手にしていたのはヴァージがもっていた大剣だった。しかも、それは形が造りかわり剣芯の中心には『ヴァージ・アリストクレア・ブルトネオ』と特殊な細工で彼の名前が掘られていた。鞘までもが拵えられており周りの若い衆は唖然としそれに文句を垂れていた。確かにそうだ、ここに写つたのは数日前でなかなか作物が実るのも簡単ではない。種などを何とか持ち出した若者や家畜を連れ出すことに成功した者も今は数を増やすことに専念させるために肉としては使わないと見える。

「お前だけずるいぞ！」

「そうだそうだ！ 俺らもなんか……無いか？」

「出発の会やろうぜ！」

「それいいな！」

「お前ら……気持ちは嬉しいが……」

「俺らの気持ちが出まんないんだよ！」

「小童、やらせてやれ」

「……ありがたく受け取らせてもらう」

その夜には天爺を含めた村人たちが彼の出立式に集まった。ただし、それに乗じて彼が啞然とする光景までもが目に映ることになつてしまう。美しく……、神々しいまでに皆のいる前でミーナが自らその翼を表したのだ。純白の汚れすら見当たらない天使のような翼。爪が長く鋭く発達し犬歯も唇にかかり大きな金色の瞳も白い濃淡の薄い物に変わった。金色の髪も白くなり毛先にカールがかかり歩くたびにあの甘い香りが漂っているようだ。実は龍族の覚醒は自分の意思でもできてしまう。ミーナはどうやったのかは解らないがそれを自発的に起こしたのだ。天爺は笑ってそれを見ているが若い村人達もヴァージ同様に啞然としている。当たり前だ、人間だと思つていた少女が実は龍族だったのだから……。だが、周りの皆が全員すぐに落ち着いた。それにヴァージが不信感を抱く。若者の親世代が静かにしろと彼女がヴァージにかけている言葉を聞こうとしているのだ。普通の人間なら若者たちよりももっと恐怖し不安な空気を流すはずだろう。しかし、それが起きない。

「ま、ミーナ嬢だけならワシらもそう成るだろうが……、ここは龍族に所縁のある村なんだぞ？」

「は？ 初耳……」

「知らないのは若いメンバーだけだろう。ワシらは皆龍族の血を少ないが引いている」

「おいおい、んじゃ俺らは皆が龍族関連なのか？」「そういうことじゃ。天龍殿は気づいておられたようだがな」

「あたりまえじゃ。ほれ、今宵は二人の出立じゃ、祝え祝え！ 別れに涙はなしじゃ。龍族のしきたりはそうなる。『若き翼ははるか空へ旅立ち翼なく血を這う者はそれを見届けよ』」

「ま、特別な二人ならそうか。俺らは地べたで頑張るからよ！ ヴ
アージもがんばれよ！」

……結局付いてくるという空気になってしまったミーナのことに
関して出立の前から不安を隠せないヴァージ。なぜなら、龍族が飛
べるようになるには相当な訓練が必要になる。ミーナが飛べること
などあり得ない。よって、彼女は彼の背に乗ることになる。出立の
前に先ほどの鍛冶職人の若者が正式に剣を手渡しヴァージが腰に下
げると歓声が起こった。そして……。ミーナに父親、パラディウス
が近づく。

「ミーナ、いつかは母さんがいつも言っていたことが本当になると
は思っていたが……。これはお前が手にすべきだ」

細い剣をパラディウスが手渡す。フローディアという女性の人物
像がよくわからないが金と銀の細工と美しい細身の細身の剣を彼女
は重そうに受け取る。どう見ても腰には提げられない。両手で掴ん
でいるからだ。そして、首飾りを彼女に託してパラディウスはヴァ
ージに一礼する。彼も元は騎士だ。それなりの礼節を持っているら
しい。ヴァージもそれに応える。エンバースの剣と新造のヴァージ
の剣が互いに打ち鳴らされ綺麗で響くような金属音を残す。それか
ら祝いの席は夜半過ぎまで続いたと言う。それにも関わらず出立の朝、
朝早くに彼は剣をふるっている。その近くには眠れなかったらしい
ローブを纏ったミーナもいた。

「いざとなると寂しい物なんですネ」

「そうか？ 俺はもう、慣れた。霧が晴れたら新大陸の奥へ向かう。
あの国ではお前の言葉は通じないからな。無駄に喋るなよ」

「え？ それは……不安です。お買い物とかは……」

「定住はしない」

「放浪するんですか？」

「そうだ。それが逸れ龍の宿命だからな」

「……はい」

「妙に解りがいいな。ま、何でもいいか。それに、お前もその内に嫌でも戦わざるを得なくなる。俺についてくるということはそういうことだ」

意味深な言葉に苦笑いをするミーナとその苦笑いを鼻で笑うヴァージ。二人の旅はこれから始まるのだ。余り多くの荷物を持つことはできない。最低限の服をそこで買えるだけの知識と生活の方法を学ぶしかないのだ。……苦難になろう、しかし、彼らの望むたびが始まる。そう、だ。厳しい旅が……。

龍旅の始まり

龍旅の始まり

ミーナは空の旅を楽しんでいた。今更ながら彼女の生活を語っておこう。気づいて居る皆も少ないとは思うが彼女は結構……お馬鹿なところが脳内の割を占めている。しかも、かなり強引にことを進めるのにかけては天才的だった。お陰でヴァージは背中の上に天真爛漫な少女を乗せて旅をするはめになったのだ。ヴァージは龍族でも大型な体格のようで空でなければミーナが寝泊まりできるほど広い背中を持ち、ミーナはピクニックか何かと勘違いしているように気持ちの良い風に吹かれながら早朝に自分で用意したフルーツサンドを頬張っている始末だ。その頃のヴァージは天爺の縄張りを抜け出たために他の龍族からの襲撃を警戒し続けていた。ミーナは未だに半分の覚醒すら済んでいない。龍族の外観は手に入れたが彼女は変身もできずに龍族特有のフェロモンの放出も抑えられないのだ。ヴァージもそれに関しては考慮しつつ出来る限りに安全な空の旅をしているらしい。龍族は寿命が長い分だけ成長もゆっくりなのだ。

「ヴァージさん！ 目的地はどの辺りなんですか！」

「ない……」

「ないんですか……。無いの!？」

「まだ理解していなかったのか……。バカにも程が……」

「バカって言った人がバカなんですよ!! ということとでヴァージさんもおバカさんです」

「何とでも言え……」

ヴァージの滑空は滑らかだ。飛行に初心者の龍は体が真っ直ぐに

安定させることが出来ず、蛇行した飛び方をしてしまう。体が滑るという現象が起こり、真っ直ぐに飛んでいるつもりでも実際は体が傾いて居るために斜めに飛んでしまうのだ。そのために龍族は飛べるようになるまでに長い時間を要する。時たま天才的に飛ぶことを早く習得する者もないことはないがそれも極少数だ。その飛べないミーナは雲に触って遊んで居る。速度が出ている現在のヴァージの飛行状態だからできるので。まるで水に触るように表面に触れば彼女の手をよけて再び合さる。手に取れない雲を触り続けるミーナをよそにヴァージが着陸をすると彼女に告げた。いくらヴァージでも体力の消費には勝てない。よって、休憩をするために近くに見つけたまばらに椰子の木が生えるだけの無人島に降り立ったのだ。ミーナはエメラルドグリーンの浅い海を興味深そうに見ている。天爺の島には大きな海岸はない。何故なら海底火山の噴火でできた島のために海底に柱がたっているような構図だからだ。だが、ここには綺麗な珊瑚礁があり平たく浅い海が広がっている。ヴァージは島に着くなり荷物を一力所にまとめて上着を脱ぎ捨てて海へ歩いて行く。ミーナが赤面していると呆れたように溜め息について説明をしてから海に入って行った。

「……（ポツ）」

「はぁ……。魚を取ってくる。お前は意外と食うからな。さっきのフルーツサンドだけだと足りんだろ。行ってくる」

ヴァージが居なくなると彼女も靴を脱いで水に足をつけた。暑い陽気の中でもひんやりしていて波打つ感じが気に入ったのか彼女はハシャグように歩き回っている。小魚を見つけたらしい。それを追いかけている。見ていただけであれば小さな子供の行動とそこまで変わらんだろ。それでも楽しそうに海で戯れる美少女。その頃のヴァージは……。水底の深いところで大きな魚を探していた。魚は底の窪んだ岩場や隠れやすい岩場に多い。体の面でも彼もエネル

ギーを多く使う変身を使っていたために空腹感はかなりのものである。ヴァージはいきなり速度を上げて泳ぎ……、巨大魚を見事に貫いた。腕で……。そして、海面に上がって行く。すると……。浅い場所で伸びているミーナが居た。近くには椰子の実が落ちている。おおかたはそれが頭に当たったのだらう。汀で倒れて居るためにずぶ濡れになっていた。そのミーナを抱き上げて揺り起こす。

「キュ……」

「……」

「う、うう…… あ、ヴァージさん。お帰りなさい」

「お前は一人で留守番もできないのか？」

「だ、だって、初めてだったんです。海が……それでつい」

「そうか、それなら仕方ないな。だが、少しハシャぎすぎだ。もう少し皇女の血筋である自覚を持つように」

「はい……」

『返事だけはいいが……不安だ』

ヴァージはミーナに協力させながら魚を捌く。ミーナの爪は細く挟むのに適した形状をしている。おそらくは太古の昔には彼ら『セントドラゴン聖帝龍』は果物や木を挟む文化があったのだらう。ヴァージの物は細く切り裂く事に長けている。正しくは切り裂き内部を挟むのに適した形状だ。深く刺さった爪を内部で動かせば傷が広がる。これは彼が戦闘龍だということを証拠づける特徴だらう。あらかた魚を捌くと彼は魚の切り身を焼き始める。待ちかねているらしいミーナは既に涎を見せ始めた。香ばしい匂いと空腹感を誘う時間が重なることもありヴァージもそんな彼女に注意をしない。ミーナに椰子の葉を使った皿で切り身を渡した。瞬く間になくなる切り身とミーナをヴァージは気持ちよさそうに見ている。その時……、ミーナが切り身をよく噛まずに喉に押し込んだらしく詰まらせたらしい。ヴァージはすぐさま椰子の実に穴を開けて飲ませた。椰子の実ジュースを飲

み少し咽せる。その後少し表情を沈ませた。

「ケホッ！ ケホッ！ 死ぬかと思いましたよ。ありがとうございました」

「あまりがつつくな。まだ沢山ある」

「……そうですね」

「どうしたんだ？」

「いえ、なんでもないです」

「寂しいんだろう？ 覚悟つてのはなかなか固まらんものだ。お前が歩む道にそんな物はこれから先にごまんと出てくる。前を見て歩け。今みたいに、楽しいことを探してな」

ヴァージの遅い手のひらが彼女の白い髪の毛を撫でる。下を向いて目尻に涙が浮いていたミーナがにこやかに笑い再び魚にパクついていた。珍しくにこやかに笑いヴァージもそれに引けを取らない量を食べ、魚は……骨だけになっている。ヴァージはその骨さえも無駄にしない。骨は削り出してナイフの代わりにし、ミーナが海で遊ぶのを見ている。ヴァージにはそのような時代はなかったのだ。人間や他の生物でもそうだが必ずしも皆が幸せな訳ではない。彼はその幸せでなかった部類のようだ。ミーナを羨むように眺めて空を仰いだ後に椰子の木陰で横になり腕を枕に昼寝でも始めるつもりらしい。剣は何時^{いつ}かがあるかわからないためにそばから離さないが鎧は着ていない。それに、ミーナも今は服がずぶ濡れになったためにヴァージが貸した薄着で思う存分海を楽しみ続けている。未だに羽ばたくほどの力がない背中の小さな龍翼を揺らし白い髪を靡かせる姿は何とも美しいが……。貝殻拾いや蟹の捕獲、小魚との戯れなど、やっていることは10歳未満の子供と変わらない。そして、ヴァージはいつの間にか弱く寝息を立て始め……。ミーナがそれに気づいた。

「あ、ヴァージさんが寝てる……。チャンス！」
「……………」

何を企んだのか知らないがヴァージに抜き足差し足しながら近づくミーナ。ヴァージは一向に起きない。これまでの彼なら有り得ないことだ。ミーナは徐々に近づいて行く……。何がしたいのだろうか。顔には満面の笑みを見せながら彼女は更にヴァージへ近づく。やはり見た目と行動の伴わない少女だ。もう少し落ち着いていれば彼女は好印象なのだが……。ついにヴァージの目前にまで迫る。…そして、ヴァージにミーナが飛びかかった。

「ヴァージさん！ 覚悟！」
「ぐあっ！！ おあ、ミーナ……………」

飛びつかれたヴァージは苦しそうだ。腹の上に馬乗りになられてしまい食べたばかりだと言うこともあり動きが取れないらしい。可哀想なヴァージはキャッキヤと子供のように遊び続けるミーナに降るように言葉を放つ……。しかし、ミーナは盛りがついたようにヴァージの上で悪戯を続け……。ついにヴァージにも軽い怒りの表情が浮かんだ。彼は敵意がなければ爪や牙を立てたりはしない。そのため彼はミーナの肩を掴んで体勢を逆転させることから始めたようだ。ヴァージが上になりミーナを見下ろす。ミーナは少し驚いたようにヴァージの顔を凝視したが……。すぐに赤面させて視線を逸らす。状況は確かにそうだが、ヴァージはいたって真剣にミーナに視線を注ぐ。

「ヴァージさんったら…………だ・い・た・ん…………」
「（プチッ）」
「あ……………」

正座をさせられたミーナの頭にはたんこぶができています。痛そうにフルフル震えながら涙目でヴァージを見返すがヴァージもなかなか許してくれない。羨も彼はしようと思ったのだろう。彼は外の世界で生きてきた。そのために厳しさも教えたいと考えても不思議ではない。だが、甘えさせることもさせたいらしく頭に手を置いて撫でた後に体を翼のない龍のように変化させて背中にミーナを乗せた。

「遊ぶなら少しは年齢相応の遊びがあるだろう。お前の遊びは少し幼稚だ。貝殻や魚ならまだしも俺に飛びついてじゃれるな。今頃の龍族覚醒で困惑してるのも解るがお前は龍族の姫だ。もう少し高貴な楽しみ方もあるだろう」

スキー板が無いが龍族ならばそこまで痛さは感じないだろう。海面を滑るように海面を撫でる。ヴァージは海を泳いで居るがミーナは水面を滑っている感覚だろう。その時……ミーナの翼が大きく開き彼女の体が浮く。ヴァージという原動力に頼る所も大きいとは言え彼女の始めての飛行だ。小さくて風を受けるのはいは末だに不安の残るミーナの翼……。ヴァージはそれに驚いている。すると……ミーナの手がロープを離れた。みーまーの体は余力でその高いところに飛んでいく。ヴァージも急いで急上昇しミーナを捕まえる。空中で制御できないミーナを空に飛ばせたままにしているのは自殺行為だしかない。他の龍族や巨鳥にはかつこの獲物だろう。ミーナをつかんで島に帰る。

「おいおい、飛ぶなら訓練してやるから」

「今……飛べましたよね？」

「ああ、そうだよ。自力ではないが飛行の感覚には恐ろしくよい感性を持っている。この分ならすぐに飛べるようになるだろう」

「ほえ？」

「龍族はな、真っ直ぐ飛べるようになるまで時間がかかるんだよ。」

「お前も例外ではないんだよ」

「ヴァージさんは？」

「普通に飛べた」

「ずるいですよ！」

口を膨らませるミーナにヴァージは宥めのつもりなのだろうか、たくましい掌を頭の上に乗せて撫でる。彼はよくこの行動をする。何故なのだろうか。それは今は触れないでおこう。ミーナもそれが嬉しいらしく今はそれでいいのだ。ミーナが急に上に向けて牙をむき出しにした。上空を抜けて行く龍が居るのだ。ヴァージは全く気にしていない。それどころかミーナを抑えるように言葉をかけ、彼の翼を開く。匂いは時として威嚇を表す物として表してしまう。ヴァージがそれを抑制する何かを放出しミーナの威嚇フェロモンを相殺しているのだ。遊び疲れたミーナは彼に寄りかかると小さく寝息を立てている。寝ている時は匂いの放出は抑えられるため、彼も安心していたようだ。島の真ん中にある大きな椰子の木にミーナを寄せて椰子の葉で隠して魚をもう一度取りに海底に向かう。龍族はそれ相応の変身技能を経験から学ぶ。たとえば、ヴァージは既になっているが翼を引っ込めて鰭と水掻きを発達させることや人間の形態のままに翼を出すなどの技能を習得しているのだ。

「はれ？ ヴァージさん？ ん……ヴァージさんの匂い。いい匂い」

「俺の匂いがどうしたって？」

「ふえ！？ いつから？」

「今さっき、晩飯の魚が取れたからな。ついでに椰子の実を飲めるようにして置いた。俺は甘すぎであんまり好きじゃないんだがな」

「美味しいですよ」

「だろうな。それから、お前の成長の早さにも驚くよ」

「はへ？」

自分では気づかない成長もいろいろある。とくに、ミーナはヴァージの認識では未だに子龍の域だ。既に数日前のように人間のころの金色の髪の毛に戻ることも無くなった。数時間の間に起こる成長の痛みなども他の龍族とは違いかなり緩いと見えた。混合された龍の特徴の影響で不安定なのか……、それとも、彼女の中に眠る潜在的な何かなのか。人間やほかの動物にも個人差があるように龍にも個人差はある。ヴァージの経験はかなり傷みを伴う急成長だった。彼の体は戦闘に適したそれに急激に成長するために筋繊維の大幅な増量や内臓器官の急速な成長などが関わり彼には成長という言葉よりも肉体の変容と言った部類の事が起きたのだ。しかし、ミーナにはその速度よりも数段早い成長が見られるのに痛みも伴わず吐血や発熱なども見受けられない。彼も彼女の成長の速度などを逐一気にしているらしい。いつ暴走行為を起こしてもいいように。

「注意しておくがお前も少しは自分のことについて考えろよ。龍族は人間とは違いかなり扱いに困る力も手に入れることになる。龍族は知らないで成長してしまえば人間と大差ない。知ること自身力を受けることになる。お前は既に俺を見て多くを知ったんだ。自らを自制する手段を覚えろ……」

「はぐはぐ……」

「聞いてるか？」

「はい？」

「お前……まあいいさ。いざとなれば解ることだ」

「ヴァージさんにも何かあったんですか？」

「ま、いろいろな。俺の場合は血なまぐさいから言わないが」

その夜はヴァージも眠りミーナを守るように眠る。翼は彼女を抱くように開き、彼女もヴァージに身を預けるように横になっていた。ミーナも彼には全幅の信頼を置いてらしく何も気にしない。翌朝からは彼の背中に乗って再び二人の旅路は続く。相も変わらずミ

ーナの食欲は旺盛でヴァージも手を焼いているらしい。しかし、彼もそれが何故か楽しいらしく彼女を観察し続けている。彼らの新天地へ飛び続けながら龍旅を綴っているのだ。

人と龍

人と龍

久しぶりの人の波の中を二人で歩く。ミーナはずっと離れないようにヴァージの右腕を抱き続けていた。ヴァージの苦言が少し不安をあまりすぎたらしい。少しの不安なら緊張感で済むが今の彼女にはあんまりにも大き過ぎる物らしかった。ヴァージが言うには人間も彼女の出身の村人のように良心的な人物ばかりではない。よって、人攫いに龍族はさらわれるというリスクを伴う。この世界には龍族以外にも複数の人間に近いが人間ではない種族の生物が存在する。^{エルフ}精人や妖精^{ドワーフ}鉦夫などが大きな種族だろう。さらに条件を減らして^{ヴァンパイア}吸血鬼や^{サキユバス}吸精魔などを広げるならば妖精^{フェアリー}、さらに悪魔も含めるならば吸血鬼や吸精魔などもそれに含まれよう。しかし、一番リスクや人と共存する歴史などから鑑みると……、龍族、^{エルフ}精人、^{ドワーフ}妖精鉦夫などが一番の対象となるのだ。それに、若い龍族の女性や^{エルフ}精人には高価な値が付く。それを包み隠さずにヴァージはミーナに告げたのだ。ヴァージの人間性からすると本当のことを暴露したとみた。外界を初めて見る彼女には少々どころか恐ろしく強い刺激だったろう。

「あんまり抱きつくな」

「で、でも、怖いじゃないですか」

「そんなに簡単にさらわれはしない。俺の近くから離れないなら俺が守れる。たとえ攫われても俺が居れば問題ない。成人した完全体の龍族に人間なんか敵う訳がない」

その通り、魔法を奪われ、人間同士でも争いの絶えない人間は既に龍族の敵ではない。討伐やいざ、龍族と戦をすれば数で圧すしかないのだ。だが、その龍族も数が減っているのも事実。理由

は定かではないが……いや、確定ではないが要素はある、龍族の老齡者の団塊という物が存在していることもまたそれに関係しているだろう。龍族と人間の戦争時代に戦士の龍族が多く命を落とした。それを補うように多くの龍族の番が子供を残した時代があるのだ。その時代の龍族は不完全に発育した者が多く寿命も短い。そこから若い龍族の覚醒が遅れているという弊害までもを引き起こしているのだ。ヴァージの語る龍族の特性から龍族は気づかなければさして人と変わらない生育をする。そのためにまぎれて解らなくなってしまうのだ。だから、龍族は龍族として生育しても育児放棄などに赤ん坊を預けてしまう親までもが現れている。余談が長くなつたがヴァージが一頭の龍として街で暴れたりすればこんな街ではひとたまりもない。龍族の群れに襲われたヴァージは先日を負傷をしたがその群れもヴァージは皆殺しにしている程だ。彼には大抵の物がかなわない。そういう龍族なのだ。ただし、ミーナが完全体になつてしまえばヴァージはミーナに劣る者となる。ミーナにはそれほど力が眠っているのだ。『セイントドラゴン聖帝龍』は恐ろしく強い。そして、無限に近い可能性を秘めているのだ。特に、他の龍族の力を混合されたミーナはさらに未知数である。『ガイアドラゴン大地聖龍』の結晶を体に埋めている彼女……さて、どんな力があるのだろうか？

「はぐ……」

「久々のちゃんと調理された料理だな」

「……」

「悪かったよ。誇張表現をしすぎたな。人攫いはこんなところでは活動しない。ここは少し目立ちすぎる。表の街だからな。裏の旧市街なんかだと危険だが、ここから出るとき以外は通らないから安心しろ。それに、お前は別の意味でも心配が残るし」

「はい？」

「ほら、あそこの机のやつら。お前をガン見してるだろう。お前が美人だからだよ」

「そんなあゝ照れちゃいますよぉ〜！」

「俺の守備範疇には無いがな」

「……なんですかそれ！」

ヴァージが肉料理にフォークを突き立てて食べながらミーナにけしかける。彼もこの数日でかなり柔らかくなった。ミーナの影響も強いだろう。ミーナの村に迷い込んだ時のヴァージは目がつり上がりかなり厳しい顔をしていたのだ。それが今は無表情というか澄ました顔でいることが多いにしても時々笑うようになっていく。ミーナは食性としては野菜を好むらしくバイキング形式の店に入っている間はサラダや野菜と他のトッピングのような物を好んで皿に乗せている。特盛りで……。今はヴァージのもっていた資金が使える区間に居るから問題ないがその内その域を超えろという。そこからは資金をその場で稼ぐことが必要になると言うヴァージ。ミーナの樂觀的な考えはその事象の直前にならなければ危機感を抱かせない程に強い。今はその大変さが解らないだろう。ヴァージもそれに慣れたかのようにその場はわざと笑ってミーナに合わせておき直前にぶち当たる苦難で彼女が学ぶことを期待しているらしい。ヴァージも意地悪い。彼がここまで茶目つ気のあるところを見せるようになってしたのは朗らかな性格のミーナの影響が大きく割を占めているだろう。ミーナ……。彼にとっては大きな変化の材料だろう。

「樂觀的つていいな」

「え？」

「ん？ いや、なんでもないよ。しかし、よく食うな。お前……」

「そうですか？」

「成長期なんだろうな」

「そうだといいいんですけどね」

店を出る……。おそらく店側はかなりの損失だろう。野菜を底な

し沼のように食い漁ったミーナのせいで野菜系の皿はほとんど收拾が付いていない。彼もそれには清々しさを覚える程だったらしくにこやかに店を出て行った。彼は不自然に時々背中を抑える。背中には……。ヴァージが背中に背負う剣は未だに誰にもばれてはいない。この街は非戦闘区域で武器の持ち込みも禁止だ。だが、彼らはこの街の検閲所を通り抜けることなく近くのギャングがたまる旧市街の空から侵入している。そのために武器は隠しているのだ。それとは別にミーナは周りの変化で疲れているらしい。宿屋に入るとミーナは疲れと眠気ですぐにベッドへ突っ伏した。小さい寝息を立てるミーナを彼は撫でながら毛布をかけて寝かせているらしい。彼はその後もずっと起きていた。彼は彼自身の感覚で周りの違和感に気づいていたのだ。街に居た時から彼が無理にミーナを煙たがるように払いのけなかったのは監視しているようなその視線を気にしていたことが関係している。目を向けずに彼は扉の方にミーナを起こさぬように厳かで低い声を出す。龍族の言語だ。

「兄上……」

「どうした？ リュフラ、何故お前がここに？」

「もちろん、連れ帰るためです」

「バカも休み休み言え。俺はあんな腐った一族には帰らない。それに俺には守るべき者もできた」

「まさか……、番になれたのですか？」

「いいや、だが、お前であつてもミーナに手を出せば容赦なく殺す」
「……解りました。ならば、私もあなたから手を引きます。既に、あなたにかなう戦士もおりません。……ヴァージ、あなたに課せられていた反逆罪を抹消し、あなたを一族からも抹消します。これからの明るい人生をお楽しみください」

扉の裏にはヴァージにそっくりな黒い髪と瞳でわりと大柄な女性の龍族がいた。その女性が外に出ると翼を開き飛んでいき……、空

中で大きく翼を大きくし体を巨大化、そして、大きく咆える。龍族には龍族にしか解らない暗号のような物があるらしい。その声を聞いた街の住民は震え慄き、恐怖にその夜の睡眠を奪われただろう。ヴァージの出身はそうに恐ろしい戒律や何かに縛られた種族の集まりらしい。彼もその夜は眠らず疲れと成長の重なりで夜は体をすっかり休めるために熟睡しているミーナを撫でながら起きている。天井を見て妹だった龍の羽音を聞き終えると彼はミーナを見つめ続けていた。

『久遠なる栄光の未来が汝にあらんことをお祈りいたす！』

「貴様らのように心をすてた龍族がいるから……俺はこの世界を憎むんだ。久方ぶりに忘れられたのにまた眠れなくなりそうだな」

そのまま早朝の日を目にしたヴァージ。彼は完全に成長しきった龍族だ。龍族は最終形態になるまでに数年の年月を要する。しかし、数か月で最終形態へと変容する方法も無いことは無い。彼は遠くを見るようにミーナの頭を撫でながら窓の外を見ている。彼の過去に何か重い物があるとみた。平常時の彼はフェロモンに自制を入れており龍になることは少ない。しかし、今の彼はかなり興奮している。ミーナがそれを吸入することは彼女の発育を急激に増進させるらしい。彼女の耳は夜の間から長いままでぴくぴくと動き、犬歯が痒いのか歯ぎしりを何回も無意識にしている。他にも彼女は成長の現れが大きく出始めていた。

「エリユン……。お前が死んでから何年たった？ もう、8年か。お前は俺を許せるか？ 俺が……再び過ちを犯そうとしていても」

「……ヴァージさん」

「！？」

「誰ですか？ エリユンって」

「……知らなくていい」

「嫌です。隠し事しないでください。ヴァーじさんがそんなに悲しそうな顔するなんて相当に思い入れのある方なんですよね？」

「そうか、別に知ってお前にメリットなんて無いんだが……教えてやる」

彼の発達が早い理由はエリユンと呼ばれた龍族の女性と一緒に居たことが原因だった。異性の血族以外の龍族が近くにフェロモンの放出を抑えずにいると龍族間では共鳴反応が起こり体の生育の速度が加速される。彼もミーナと同じ状態だったのだ。ただし、彼の場合には気づくどころ知れた幼馴染と二人だったために成長の増長も相互的で双方が恐ろしく早く生育した。それに、彼の血はかなり濃いために龍族としての生育も早まって行く倍率や刺激の多さもことになったらしい。他よりもそれだけ早く成長したのだ。

「エリユンは火龍族の娘だった。俺とは番になる約束までしていただよ。しかし、俺の出身の一族『混沌龍』カオストラゴンは他族との交際を認め

ない。厳格な一族でな。他の龍族ではなく同じ龍の血しか受け入れないんだよ。『混沌龍』カオストラゴンは純潔だということを重んじる。そして、

俺は『混沌龍』カオストラゴンの首長の息子にして、その一族の王子」

龍族には種族ごとに王族が存在しそれを元に種族を取りまとめている。多数の種族が存在する龍族の長たる王族は50年に一度のペーイスで集会を開き領土や食料生産、人間との交流の制限に関して話しあう。その中で他の種族と上手く考えの交わらない種族、それがヴァーじの一族『混沌龍』カオストラゴンだったのだ。過激な思想の戦龍であるヴァーじの一族は人間の殲滅を最後の目標にしていたらしい。しかし、他の龍族や跡取りのヴァーじはそれを否とする。そのために龍族間の戦争まで起きた。その影響で今の戦争は長期化していたのだ。

「俺はお前達『皇帝龍』セイントドラゴンの王族を殺したのは俺の父親、ヴァーゲル

デだ。俺は……ヴァーゲルデを殺した。その時に犠牲になったのが火龍族の姫だった……、そう、エリユデ。エリユデ・イフライト・ブラングナー。俺の愛した……これまで唯一愛した女性の龍だった。俺はその時に狂い、一族の戦士を殺して里を出ている」

父親がエリユデと結ばれることを拒み母親は既に人間に殺されていた。いや、彼の補足的な説明を聞くとあまりよくない一族内の風習を感じ取れた。王族の息子とは言うが実子ではないのだ。王族に推挙されるのは成長した龍族の子供の中でより強靱で戦闘力に秀でた龍である。ヴァージはその時に推され、そのままその座に付き、実の父母は人間に殺されていたために彼はすぐに王族の子息として即位の段取りを進められた。

「これが全貌だよ。俺の一族は気に入らない事があれば構わずに龍でも殺す。ヴァーゲルデは俺の目の前で彼女を殺した。そして、俺の逆鱗は彼を殺した事では治まらず……たくさんの罪の無い一族を殺し、里を逃げ出た。その後始末に俺の実の妹が昨夜ここに来ている。だが、帰らせた」

「私じゃ、代わりになりませんか？」

「ならん」

「……」

「なんだ、不満そうだが」

「……私、そんなに女として見られてないんですね」

「ああ、お前はまだまだだ。胸も小さいし」

牙を立ててヴァージの腕に噛みついたミーナ。ミーナの牙は鋭く鋭利で堅い。ヴァージの鱗程度では簡単に貫き砕く。血が垂れるなか彼女がすぐに舐めてから牙をはずし、膨れっ面を反対に向ける。ミーナは確かに綺麗だが、まだ、人間でも龍でも言える女性的な観点的生育は芳しくなかった。ミーナはヴァージの腕を握りかなり龍

族として発達している筋力で握りしめ怒りをあらわにしながら彼に
宣戦布告をしたらしい。粗末ともいえないが華美でもない宿の一室
での出来事……。しかし、彼らは着実にその道をたどっていた。

「良いです！ 絶対いい女になってエリユデさんを超えます！」

「はいはい」

「おざなりですね……。知らないですから。後からミーナがよかつ
たなんて言われても」

「大丈夫だよ。お前が俺の近くににいる以上俺はお前を番とは認めな
いから」

「なら、もう一つ」

「ん？」

「私がヴァージさんに勝つか……。綺麗な女らしい龍になったら……
一番にしてください」

「何年先だろうな。それまで俺と一緒に入れると良いな」

彼は意味深な言葉をミーナに向けた。ミーナは既にその説明を受
けている。世界には逸れ龍の群れが多数存在しているという。途中
で女性の龍族が集うその群れに接触しミーナが受け入れられればそ
こにミーナを置いて行くということだ。男性の龍族とは一緒に居な
い方がいいと言うこともある。過度な発育は寿命を縮めることにも
つながるのだ。まあ……。ミーナやヴァージのような数千年を生き
る龍からすればスズメの涙なのだが。ミーナはなおも脹れっ面を彼
に向ける。白い瞳は更に怒りを含み彼に先のとがった舌を向けてい
た。

「ふん！ 本当になつて見せます！ あなたの初めての女性はエリ
ユデさんでも私の初めて出会った龍族の男性はヴァージさんなん
ですから」

「……」

「なんですか」

「お前つて、純情なんだな」

「心外です!」

「ははは……」

「なんかバカにされたみたいで納得いきません。ヴァージさんはどんな女性がこのみなんですか？」

その次の日、彼らはさらに飛んでいく。ヴァージはミーナに飛行の訓練をわせるためにいろいろと準備をしている。これからの旅に備えて……。

和の国1……茶屋遊戯

茶屋遊戯

ミーナとヴァージは街道で客寄せパンダをしていた。ミーナは少しはだけさせた和風な服装でテトテトと覚束ない足取りで下駄を引きずるように言葉が通じないながらも身振り手振りで応対している。彼らが居るのは和の国と呼ばれる国の集合体のような国家の一つ、茶山の国にいた。お茶が名産で名前のごとく茶屋が国の至る所にある国だ。その国の外れにある街道に面した茶屋で住み込みの仕事をしていたらしい。ヴァージは茶と団子に乗せた盆と龍族特有の美しい顔を使い、街道を使って国を通過する渡り芸子を捕まえていたのだ。さながらホストのようなやつだな。茶屋にはいろいろ種類がある。本当に喫茶店としてしか機能しない普通の茶屋、街中に多いあまり大きな声では言えないようなことを専門に酒と売春をしている遊郭茶屋、そして、街道や大きな道に沿ってたくさん軒を連ねるのが宿茶屋だ。簡単には休憩所と宿屋を合わせたような場所だろう。

「お疲れですね。お嬢さんはどちらから？」

「今回は上方の祭り芸子をするためにみんなで登ってるんだよ。お兄さんもお上手だねえ」

「いえいえ、上方に向かわれるなら揉みほぐしておきますか」

「あら、じゃあ、お願いしようかしら」

ヴァージの接客の中心的内容は女性の客を捕まえることだ。店の従業員の他にも美男子は数人居たがヴァージほど外で人、特に女性を捕まえるのに適した人物はいない。美形で男らしく、内心はどうか知らないがサービス精神が高い、商売の上手い男性は……。そして、今回は二人が世話になることになった茶屋はかなり繁盛した。

ミーナの影響が強いことは言うまでもない。ミーナはこの国では異国人とすぐに区別され道に少し出れば人ばかりができる。街道に面し人の通りは豊富だが、この辺りは砂嵐の強い地域のために宿屋に足を止めて休憩をする人は多くともなかなか宿屋として一夜を過ごす客や一度にたくさんの客を取れる程の名物もない。そこで、今はミーナを餌に稼げるだけ稼ぐのが得策だと言うことだろう。ちなみに、これは自分達が食いつなぐためにヴァージが茶屋の店主に吹き込んだネタのそのままだ。彼もしたたかである……。彼を敵にはしたくない。ミーナは趣旨も解らずただ、宿屋の衣装を着付けられ盆を持ってヨタヨタしているだけなのだ。だが、彼女は彼女なりに頑張っているしヴァージも彼女を逐一、目の隅には入れていた。

「あんがとよ。兄ちゃん。アンタらが来てくれたおかげで大収益だ」「そうですか。なら、これから3日はよろしくお願いします」

「おうよ」

「……」

「どうした。ミーナ」

「……」

「わかったわかった。後からな。雇用の条件はそのままにお願いしますよ」

「わかってらあ。今日は上がりな。砂嵐が来るからよ」

彼の企みに気づけないミーナは空腹と砂、そして、急な辛い労働をしたために体が悲鳴をあげていた。脚が棒になり歩けずに砂嵐のために客入れを中止し皆を宿屋に引き上げるのにまだ取り残されているらしい。そのミーナは抱き上げられて運ばれ部屋でヴァージのマッサージを受けている。確かに彼女の華奢な体では瞬間的に強い力を出せても1日を働き詰めと言うのにはあまりにも弱すぎた。ヴァージのマッサージがツボに当たると時々、奇声のように小さくはあるが変な声を上げる。マッサージは少し痛いくらいが適度な刺激

だ。物にもよるが龍族は傷の治りや回復はかなり早い。彼女もそれが顕著だ。

「ひう……ふぁー!!……痛いですう」

「我慢しろ。効果が出るのは明日だ」

「げう……。女の子がマツサージされるってなんかHいです」

「バカ言え」

「あ痛て……」

「色気のない17・8の『女の子』が何を言ってた。お前が手を出されたいならもつと成長するんだな」

「ぶう!!」

ミーナが座り直しヴァージに拳を向けた。龍族の変化は着実に進み、彼女の体も引き締まりつつある。旅の始まりからほぼ1ヶ月が経過したが……ミーナの成長はヴァージの目を見張るところもあるほどだ。ヴァージがミーナに色気はないと言うも実際は年齢不相応な美しさを持ち、性格がもう少しお淑やかで口答えが少なければ彼女もなかなかいい女と言えなくもないのだ。ただし、妖美さ……などはなくあくまで清純だが。どうも彼はそのミーナを遠ざけるような動きを取っている。遠くに置きすぎもしないがけっして一定のエリアへの侵入をしない。そんなところだ。そんな彼の行動には疑問符を打つところも大きい。彼はミーナが安全所な所に居る時は一人でどこかに言っていることがあるからだ。何をしてるのか解らないが……。

「ヴァージさん。どこに行ってたんだろう……」

「ミーナ・エンジェリア……ですね」

「誰!? 言葉が通じてる?」

「当たり前です。私は龍族ですから」

「それに……ヴァージさんに似てる」

「それも当たり前ですね。私はリュフラ・アリストクレア・プルトネオ。兄がお世話になっています」

「妹さん……」

黒いマントに身を包んでいて、釣り上がった目つきをした女性が居る。体は細身だが女性にしては大柄な体軀をしていてミーナとは全く違う。黒いストレートの髪が月明かりを照り返し美しさを際立て、つぶれているらしい片目にはバラの金細工きんが施され眼帯の代わりをしていた。わりと大きな瞳にも関わらずかなり厳し目に見える瞳でさらに言えば牙がヴァージよりも長く発達しており爪もよく見ればネイルアートのような物が付いている。そして……。

「私が何故ここに居るか解りますか？」

「何で？」

「……本当のことを言ってしまうえばあなたを抹殺するために来ました」

リュフラは恐ろしいことを口にした。ヒールの高いブーツを履いていて爪だけ出しているグローブをつけているリュフラ。ミーナの方を向き気が付いたように言葉を述べてから彼女はマントの内側に手を突っ込み中から葉巻きを取りだして吸い始める。近くの岩に腰を下ろすと彼女は脚を組んで腰の短剣をミーナに投げ渡す。

「あなたのおバカさを見たらやる気がそがれました。兄上も物好きですね。こんな小娘に好意を寄せるなんて。胸も平ら、まだ幼い顔立ち、龍族としての発達もまだまだ未完、おまけにおバカ、そして極めつけは……この緊張感のなさですね」

「フニユイ……」

「はは、私も貴方のように純真のままで居たかった。これを持って行ってください。兄上が私に残した物です。兄上のそばに居られる

なら……これを持つ資格があります」

「牙？」

「それは私たちの父の牙から作り、兄上がまだ弱かった私にくださった物、私にはもう、必要がないのですね」

「あの……」

リュフラは葉巻きを吸い終える。口から吐き出した煙には火の子が混ざり先のとがった長い舌を外に出してから再び戻す。そして、口笛を吹き……何かを呼びよせていた。リュフラはいきなり剣を抜きミーナに向ける。そして、その時初めて、龍族が人間の姿で戦闘をすることを彼女は体験した。恐ろしく速い。リュフラの短剣で何とか彼女の繰り出すブロードソードを弾き返しながらじりじり後退する。ミーナに眠る龍族本能の冰山の一角が初めて開花する瞬間だった。刃と刃がぶつかる度に火花が散る。その戦闘の途中でミーナの目に大きな変化が現れ、瞳孔が広がり牙が徐々に発達し爪も伸びていく。

『そうです。貴方は、皇龍の孫娘。私の敵……。殺さない、でも、今ここで私が勝たねば彼女に負けては、一族の積年の恨みを晴らさねば』

「力が……湧いてくる。この力で私は……」

「来い！」

ミーナの二刀流剣技が始まる。リュフラの投げ渡した短刀とミーナの母、フローディアの剣が交互に繰り出されていた。その攻撃が始まると今度は一転し、ミーナが圧している。白い剣と黒い牙の刃がリュフラを狙う。リュフラのマントが大きく開き背中の中黒く無骨な龍翼が羽ばたきを始め体が舞い上がっていく。空に舞い上がるとミーナも革製の力バーに短刀を治めて翼を開く準備をした。……彼女の翼が開く、大きく開いた白い翼が風を受けるその瞬間、白い光

の筋が夜空を割るように空に上がり空中でリュフラとぶつかり合う。爪と爪のぶつかりに、ミーナの覚醒が進み……尾が現れた。その尾がリュフラに激突した彼女は真つ逆さまに落ちていく。

「なっ！ 尾で……」

「は！」

リュフラが落とされた。地面に落ちたリュフラにさらに追い打ちをかけるミーナ。爪を真つ直ぐに向けて落とし、残り数メートルで横から何かが彼女の腕に当たりミーナの腕の骨が砕かれた。同時にリュフラの首にもかなり無骨な掌が爪を立てて双方が次の瞬間には殺されるというような状態になっている。砂煙が治まるとそこに居たのは明らかに怒りで顔を硬直させている。瞳は真つ赤に染まり、爪にも同様の变化が受けられた。ミーナはそれに驚き、リュフラはそこまで驚きはしなかったが……。

「お前ら、何をしている？」

「兄上」

「……ヴァージさん」

「お前らが何をしたかったのかは知らんが……。お前らは龍族をさげ出す気か？ 直に人も来る。お前らは俺が一時的に保護してやるが……、ミーナ！ お前は二度と俺の前以外で力を見せるな！ それが守れないなら、俺は容赦なく女龍の群れに引き渡す」

厳しい声のヴァージの声に痛みと恐怖で悶えるミーナ。ヴァージがミーナを背負おうとするが彼女は後ろに引いてそれを拒むために彼はそのまま帰って行く。リュフラが肩を貸し、茶屋に入って行った。リュフラの事を茶屋の家族に話したヴァージがミーナのことも説明しておいたためにミーナは手当てを受ける。完全に骨が折れていた。まだ、完全な覚醒の終わらないミーナの体に龍族の攻撃を耐

えるだけの防御力はない。リュフラがミーナに話しかけている。彼と彼女の過去だった。ヴァージが語ったことも多かったがヴァージの新たな情報もミーナには手に入れたことになるのだろう。折れた腕はかなりの速度で回復している。その証拠にかなり痛みを伴いながら腕の周辺に変化が見られ始めていたのだ。

「私たちは人間に両親を殺され、人間に強い敵意を持っています。しかし、彼のように理解ある龍族だから虐殺を行うことはしません。しかし、彼はむしろ龍族を怨んでいるのでしょう。彼の義父として彼を教育した男を彼は殺し、里を出ると、逸れ龍として旅を続けていたようです。そんなに痛みますか？」

「違います。ヴァージさんにあんなこと言われたの初めてで」

「でしょうね。ですが、あれは過激すぎますが言ってくれるだけです。私なんか貴方がいなければ問答無用で殺されたでしょうね」

「……」

その時、襖を開いて店の主人の娘が入ってきた。実は彼女も龍族だ。この国にはヴァージ達とは違い『長龍^{ナーガ}』と呼ばれる龍族がたくさん住んで居るのだとか。水を守護する守護龍だという。昔から神格化され彼女達の長は海底深くの竜宮城にいるらしい。乙姫も実は龍で二頭は番だそうだ。ミーナの沈み方に気づいて龍族の言語に切り替えてミーナに話しかけ始めた。リュフラはマントをとりその露出の高い服なのだろうか？ それをヒラヒラさせながら滝に向かったらしいヴァージと話すために外に出て行く。彼女の服装は奇抜だ。袖は長いが肩ははだけ、腹だしというかビキニの水着のような物に特殊な龍の鱗が使われた鎧のようなズボンと右の肩には肩当てと肘当てがついている。靴はブーツ、眼帯、髪はまとめず流し、ロツカ¹のグローブみたいな物をつけていた。

「兄上」

「何だ、リュフラ」

「報告くらいはしますよ」

「ミーナのことが」

「ええ……彼女の覚醒はおそらく三分の一くらいですかね。私の感覚では兄上にあてられています」

「どういうことだ？」

リュフラが言うには女性の龍族は特にフェロモン以外にも成長要素が数個ある。彼女の場合はヴァージと居ることで意識的に成長をしているのだ。ミーナが村を出る時もそうだったように彼女は意識的にヴァージと居たいと思ったり防衛本能を見せるとそれに合わせた急成長を遂げるのだ。ミーナの年齢はそれをかなり受けやすい年齢らしい。かなり感じ取り易いのだ。

「そうか」

「突き放してはなりません」

「ん？」

「エリュデさんのことを気にしておられるのはわかります。しかし、彼女のことをお考えください。不完全に覚醒させられた龍族の女性を突き放せば……生きてはいけません」

「根拠は？」

「わかりませんか？ 彼女がなぜ、一気に成長したのかが。あなたに再び会うためです。私が確かめたかったのは彼女が……」

岩壁に押し付けられたリュフラがなおも言葉を続ける。彼女はヴァージ以上に頭が良く考えを回す龍らしい。体中に彼女も入れ墨が見受けられその入れ墨が赤く光り、体に熱を持たせヴァージに手を離させる。ヴァージが剣の柄に手をかけようとしたが彼女はなにもしない。

「……」

「私は嘘は言いません。彼女からは明らかな『愛』を受け取りました。私が叶わぬなら私はミーナの愛を手助けします……兄上」

「……だから追ってきたのか？」

「はい、血の繋がりは越えられないのです。私は諦めます」

兄に抱きつき頬を染めた勇壮な女性騎士。その頃のミーナ達もヴァージのことについて話していた。黒髪が綺麗な日本人と同じ見た目の水龍達。ミーナの前に正座で座ったお諒はミーナと話しながら彼女とヴァージの関係を話している。折れた腕はその間に回復の力を継承している水龍の力でほぼ回復し動かせるまでにはなっていた。

「ミーナさんはヴァージさんと夫婦の契りを結ばれたんやろ？」

「え、いや、私がお子ちゃま扱いされてるからまだ……」

「でも、好きなん？」

「う……ん」

「なら、攻めるしか無いやないか。うちは理解できへんよ。なして待つとるん？ 攻めな進めせんがな」

龍族であるお諒も端正な美しさがある。その兄の水太郎みたらうは侍所に入っているらしい。仕事で帰ってくることでできならしく兄嫁はかなりやきもきしているとお諒が言う。ミーナはお諒の迫力に押されていて口を開く間合いすらない。白い瞳を見開き後ろに引いていく。板床の上を滑り、詰め寄るお諒から逃げようとするが……。

「逃がさへんよ。今、決めや。あの人と夫婦になりたいか？ 違うんか？」

「なり……たい」

「はあ？ 聞こえんよー！」

「なりたい！ ヴァージさんと番に……」「そうか、だが、お前が

いい女になるまでは許さんからな」

ヴァージとリュフラが帰ってきたらしい。ヴァージの目には軽い怒りが未だに残り赤い瞳には血走りも見えた。リュフラは出会った時のように無表情に近い顔をしている。リュフラのスタイルを見て何やらお諒が告げていたが。

「私は妹です」

「そうなんか。なら、問題ないか、ほら、ミーナさんはいかんでええんか？」

「ひゃわ！」

ミーナがヴァージにぶつかる。彼は龍族の男性の中でも大柄だ。長い髪はリュフラとも似ている。血は争えないのだろう。二人が入りリュフラとお諒は別室に消えた。ミーナが気まずそうに部屋の隅にいる。白い髪はお諒に仕事柄邪魔だろうと言われてまとめ上げられたまま、細く白い髪の毛は崩れもしていない。ヴァージはずっと黙っていた。赤い目は弱まり今は黒いが顔にはなかなか許さないと言ったかなり根に持つような感触がある。

「なんで、力を使った？」

「ご、ごめんなさい」

「言っただろう。龍族は本能のままに敵を殺す。リュフラがいくらお前を試すために襲ったからと言って使っていい物といけない物がある。それに、危なかった」

いきなり抱きしめて来たヴァージに驚きながら身じろぎしてその腕を解こうとする。しかし、ヴァージの屈強な腕は簡単には解けない。ミーナにしか聞こえないように彼は彼女を引き寄せたのだ。襖の裏側にお諒とリュフラが聞き耳を立てていたのは言うまでもなく、

ヴァージはそれを避けるために声を絞り、ミーナに注意をした。

「未だに八割の覚醒が終わっていないお前は体の細胞変化や戦闘に体がついて来ない。だから、今は使うな。お前は番ではないが大切な恩人だ。失いたくはない」

ミーナが最後にヴァージの肩に噛みついた。犬歯が突き刺さり少量の血が滴る。それをミーナが舐めとり始めた。人間が龍になるには血を体に入れ、さらに体が変化してからその変容に耐え切らなくてはならないが覚醒途中の龍族は血を飲むと覚醒が早まる。そして酒のような効果を発揮し、特に異性の血液はホルモンの関係から性感帯を刺激し成長の更なる助長をするらしい。それをリユフラから聞かされたミーナは早速実行したらしい。

「ヴァージさんはいつも勝手です。私、守って欲しいなんて一言も言ってません。私は対等な立場に立ちたいんです。だから、直ぐに番に選べなんて言いませんよ。私もいい女に成りますから、協力はしてください」

ため息をつくヴァージ。その彼の胡座に収まるように座ったミーナ。ニコニコしながらミーナは幸せを味わって居たのだろうか。ヴァージとミーナはその夜をそのまま過ごし、茶山の国での一夜を明かした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3750y/>

龍旅の記

2011年11月17日09時50分発行